

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★



Data

監督: イム・サンス

出演: チョン・ドヨン/イ・ジョン
ジェ/ソウ/ユン・ヨジョン
/パク・チヨン/アン・ソヒ
ヨン

👁️👁️ みどころ

『ユア・マイ・サンシャイン』(05年)と『シークレット・サンシャイン(密陽)』(07年)で社会性豊かなすばらしい熱演を見せたチョン・ドヨンが、一転して大胆な肢体(?)のメイド役に挑戦!大邸宅のご主人様は裸の王様でもいいが、妻とその母親そして新入りを審査したベテランメイドが入り組んだ女同士のバトルは興味津々……。一夜のエッチでの妊娠を契機として起きる大騒動とは?そしてそんな中で清楚なメイドがみせる意外なしぶとさと、「復讐」をキーワードとしたあっと驚く行動とは?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■チョン・ドヨンが、下女=メイド役に・・・■□■

韓国女優チョン・ドヨンの最新作だった『素晴らしい一日』(08年)は、パンダのような目の何ともケバイ化粧が目につく映画だった。またストーリー的には、金貸し女がかつての恋人から貸金の取立に臨むものの、結局は金と愛が微妙に重なる中で?というものだったが、その出来としては私の採点では星3つ。しかし、『スキヤンダル』(03年)で顔と名前を覚えてしまったチョン・ドヨンの『ユア・マイ・サンシャイン』(05年)『シネマルーム11』257頁参照)と『シークレット・サンシャイン(密陽)』(07年)、『シネマルーム19』66頁参照)は圧倒的に星5つの採点であり、作品の出来はもちろんそこでの彼女の演技は絶品だった。

今や韓国を代表する大女優に成長したそんなチョン・ドヨンが、キム・ギヨン監督の1960年の名作『下女』をイム・サンス監督がリメイクした本作に、下女=ハウスメイド役で登場!日本で大流行した「メイド」はご主人様の言うことを何でも受け入れ従順に対

応するもので今や韓国でも中国でも大人気だが、ご主人様のフン（イ・ジョンジェ）とその美しい妻ヘラ（ソウ）、そして6歳の娘ナミ（アン・ソヒョン）が住む大邸宅に入った、チョン・ドヨン扮するハウスマイド、ウニは一体どんな役割を・・・？

■女子高生が「制服が命！」なら、メイドだって・・・■

あなたは「なんちゃって制服」っていう言葉を知ってる？昔からセーラー服は清楚な女子高生の象徴だが、それは吉永小百合や山口百恵時代の話で、最近の女子高生の制服はブレザーにプリーツスカートが定番で、おしゃれのポイントはボウタイ。他方、日本で大人気となったメイド服の定番はかつぼう着ならぬメイド服だが、近時の韓国上流階級の邸宅における住み込みメイドの制服は？

フン家には既にベテランメイドのビョンシク（ユン・ヨジョン）がいたが、彼女は「家政婦は見た」などの家政婦シリーズで2時間ドラマの女王となった市原悦子と同じくフン家の中のことはすべてお見通し。しかし、そんなベテランメイドの性格は複雑怪奇だから、フン家で発生するすべての事件はビョンシクの対応によっていかようにも変化していく可能性が・・・。形式的にはご主人様の好みだが、実質的にはビョンシクを選択によってウニの制服とされたのは、白いブラウスに紺のタイトなミニスカートを基本とする組み合わせ。この制服では歩くには何の不自由もないが、身体を動かして働くには少し不自由？

メイドの仕事の基本は、掃除、洗濯に食事の準備。さらに、ウニには子供を産んだ経験はないものの、6歳の娘ナミの世話や双子が今お腹の中にあるフンの妻ヘラの世話をしなければならないから、毎日結構忙しそう。ご主人様の風呂の掃除は毎日する必要はないが、そんな制服でバスタブの掃除をしていると、太股はもちろんスカートの中の下着も丸見え。ご帰還のご主人様が、そんな若く美しいウニの制服姿を目にすると・・・。

■R-18指定からR-15指定に変更！そのワケは？■

本作についてはどうしてもスケベ親父的な視点からの評論が多くなってしまいが、もともとR-18指定とされていた本作は、映像はそのままながら、字幕の変更によってR-15指定に変更されたい。それはつまり、字幕の表現の仕方によって、少しだけエッチ度が弱まったということだ。もっとも、現実には両者を対比しなければその違いはわからないので、これ以上突っ込むことはできないが、①フンがワインボトルとワイングラスをもって、初めてウニの部屋を訪れ、裸に近い姿で眠っているウニに対して、シーツを取れと命令するシークエンス、②裸でうつぶせの姿勢で眠っているウニの部屋を訪れたフンが、ビョンシクから覗かれているとも知らず、ウニとめくるめく一時のセックスに及ぶシークエンス、③ヘラとのセックス上の行き違いの後にウニの部屋を訪れたフンが、一方的にウニにしゃぶれと命ずるシークエンス、等々、本作はエロティックシーンが満載だ。『シークレット・サンシャイン』で2007年のカンヌ国際映画祭主演女優賞に輝いたチョン・

ドヨンが、よくぞここまでの体当たりシーンに挑戦したものだ。それはあたかも、若松孝二監督の『キャタピラー』（2010年）で寺島しのぶが大胆なセックスシーンに挑戦し、見事第60回ベルリン国際映画祭主演女優賞を受賞したのと同じだが、これこそまさに女優魂の発露だ。私の大学時代に全盛期を迎えていた日活ロマンポルノは、どちらかというところの当時は暗いイメージ、アウトサイダー的なイメージだったが、今や西九条の名物映画館「シネ・ヌーヴォー」でも日活ロマンポルノシリーズが長期にわたって上映され、あの時代の日活ロマンポルノの名作への理解と共感が高まっている。もっとも、多くの日本人観客が本作を観て意外に思うのは、フンの求めに対してウニが意外に従順に応じるうえ、ある時点以降は自分も積極的に快樂を求めていくことだろう。これって一体何？それがわかるのは女だけ？私を含めて男のあなたには、こんなウニの対応は本質的に理解不能なのかも？



■□■女2人のバトルと思いきや、実は4人！■□■

映画作りにおいて、「女のバトル」というテーマは最適。司馬遼太郎原作の『項羽と劉邦』のような英雄同士のバトルは歴史物としては面白いが、人間の本性に迫る点では、クールな弁護士役の岩下志麻と毒婦・球磨子役の桃井かおりが激突した、松本清張原作、野村芳太郎監督の『疑惑』（『シネマルーム10』33頁参照）は最高に面白かった。本作では、たった一度のご主人様とメイドとの間の秘められたエッチによってウニが妊娠してしまったことが、すべての問題の発端だが、そこからうまれる女同士のバトルは私たち男には想像もつかないような激しいものに……。

バトルの第1は当然ウニとフンの妻ヘラとの間で発生したが、そこに見るヘラの対応はまだ若いだけに想定内・・・？本作で面白いのは、ここで新たにヘラの母親ミヒ（パク・チヨン）が登場することだ。バトルの第2は、少しバカなのか鈍いのかウニ自身は自分の妊娠に気づかなかつたのに、いち早くその変化に気づいたビョンシクが、ヘラよりもヘラの母親ミヒにそのことを報告したため、さまざまな策略がめぐるされることに。ミヒが立てた策略の基本は、①一定の金を支払い、②人工妊娠中絶をさせ、③お屋敷からウニを追放することだが、さてその具体策は？バトルの第3は、とにかく腹の中が読めないビョンシクとウニとの間のバトルだが、その複雑な心理バトルはしっかりあなた自身の目で。

そんな風に、もともとはウニの妊娠を契機としたウニとヘラによる女ふたりのバトルと思いきや、実は女4人のバトルに！

■□■ウニの意外なしぶとさと、あっと驚く決断にびっくり！■□■

ヘラとヘラの母親ミヒの前にビョンシクによって引きずり出されたウニは、針のむしる状態で一定の対応を迫られたが、さあ、その後のウニの決断は？6月20日にやっと復興基本法が成立したが、6月22日に会期末を迎える国会の延長をめぐる、菅直人総理はなんともすさまじいねばり腰というかしぶとさをみせている。それと同じように本作では、無口で従順なメイドと思われていたウニが意外なしぶとさをみせ、フンに対して「私は産みます」と宣言するから、事態はますますややこしい方向に。ミヒが立てた前記①、②、③の策略は当事者間の説得と納得によるひとつの合理的な選択であり行動だが、毒物を使った「無理やり墮胎」ではないかと思われる動きや、故意か過失かが微妙な事故でウニが大怪我をすることになると、これはひょっとして殺人未遂事件？そう思わざるをえない事態が続くが、それを企画し実行しているのはいったい誰？

そんな中、一方ではヘラが無事に双子を出産し、他方で人工妊娠中絶を受けたウニがお屋敷を去ることになるのだが、そこジ・エンドでは映画としては何の面白味もないことになる。菅総理のしぶとさは国益の喪失と国民の不幸に直結するだけだからもういっしょに減らしてもらいたいが、「復讐」をキーワードとしてウニが示す意外なしぶとさは？ラストに見せる、あっと驚くウニの決断に、あなたはきっとビックリするはずだ。

2011（平成23）年6月21日記